慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	MarloweとDoctor Faustus
Sub Title	Marlowe and his Doctor Faustus
Author	黒川, 高志(Kurokawa, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1972
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.31, (1972. 2) ,p.151(40)- 170(21)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00310001-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Marlowe と *Doctor Faustus*

黒川高志

伝説は一つの流動体，即ち絶えず生成し発展してゆく流動体である。Faust 伝説も又その例外ではない。Marlowe の *Doctor Faustus* から Goethe の *Faust* に至る迄にも，この伝説からは常に新しい枝葉が生じ，新しい解釈が生じてきた。Faust 伝説は，その時代を反映し時代の流れのうちに進化してゆくのであって，その結末はそれを取り扱う作者の嗜好や主義主張によって，或いはその時代的背景によっておのずから異ってくる。魂を悪魔に売り渡した男は却罰を受け永却の地獄に堕される。これが Marlowe の劇である。一方，自我を拡大して悪魔に反逆し神に迫らんとした傲慢な男は，最後に慈悲を求め救われることになる。これが Goethe の劇である。しかし私はここでその両者の比較をするつもりはない。本稿は，エリザベス朝という中世から近世へ移行してゆく過渡期ともいうべき精神的激動の時代を背景にして，Marlowe の劇作品 *Doctor Faustus* の中にこの伝説がどのような形で継承されているのか，又そこに作者の主義主張がどのように描写されているのかを検討したものである。

Marlowe が *Faustus* 創作に当って依拠した唯一の原典は，1592 年 P.F. という人物によって書かれた英訳版 *The History of the Damnable Life and Deserved Death of Dr. John Faustus* であることには疑問の余地がない。従って Johann Fausten に関する史実はそれ自体興味があっても，それを直接 Marlowe の *Faustus* に関連づける必要はないのである。Faust 伝説が初めて文学作品としてあらわれたのは，英訳版に先立つ 1587 年 Frankfurt-am-Main の出版業者 Johann Spies によって出版されたドイツ語版 *Historia von D. Johann Fausten* であった。このドイツ語版

は，キリスト教徒の読者に寄せる献辞とその序文が示すように，悪魔に魂を売り渡すことを契約した魔法使い D. Johann Fausten の恐るべき伝記が，全キリスト教徒への戒めとして強く主張されており，極めて教訓的色彩の濃いものであった。このドイツ語版の作者は不祥であるが，彼は創作に当って当時の人文主義者達の作品を参照し乍ら，彼特有のルネッサンス的な知的要素を付加した。その付加はともかくとして，このドイツ語版がその本質に於いて，己れの傲慢，野心，貪欲を満たすために，己れの魂を悪魔に委ねた人間に対する神の恐るべき懲罰を描いていることは疑問の余地がない。これは1957年秋に初版本が出されて以来，非常な反響を呼び，同年末迄に四版を重ね，更に原本の 69 章に 8 章を付加した増補版が出版されるという空前の人気であった。以後，この原本に筆を加えたものが，1589年，1590年，1592年，1599年と出版された。Spies による初版本は今日 British Museum に保管されている。

Marlowe が依拠した原典はこのドイツ語版ではなく，先に述べた 1592 年英国で出版された P.F. による英訳版であるが，この英訳版の題とびらには「新たに印刷され，適宜不備な点を修正したもの」(Newly imprinted, and in conueni/ent places imperfect matter amended:)[1] とあるので，これ以前に既に古い版があったものと推定されている。[2] P.F. が如何なる人物であったかは不詳であるが，有能の士であったことはほぼ間違いない。概してドイツ語版に忠実に依拠しながら，全 63 章に再構成しているが，一方彼はエリザベス朝の翻訳家の常として，そこに彼の独創性を自由に付加することを忘れなかった。Marlowe の戯曲 *The Tragical History of Doctor Faustus* が，この P.F. による英訳版に依拠して書かれたと推定出来るその根拠は，Marlowe の作品に見られる幾つかの特色がドイツ語版にはなく，英訳版にのみ見られる特色であること，及びドイツ語版からやや逸脱した P.F. の originality を証明出来る箇所が，そのまま Marlowe の作品に採用されていることである。英訳版の著者 P.F. は，題とびらに書かれた "damnable life" という文句とはうらはらに，Faustus の知的情熱を強調する一方では，彼の罪悪を看過するような描写

をした。Rohde や Boas 博士が指摘しているように，パドウア (Padua) の大学を訪れた Faustus が自らの名前を「飽くことなき思索家 Faustus 博士」(“Doctor *Faustus*, the vnsatiable Speculator”) と署名するのは英訳版のみで，ドイツ語版にはこの文句はない。同様に第二章では，ドイツ語版が「彼の奔放なる恣意と放埒とが彼を押し止め彼を魅惑した」(“dann sein Fürwitz Freyheit vnd Leichtfertigkeit stache vnnd reizte ihn also”) となっているのに対し，英訳版では「彼の思索は実に素晴しかった」(“his Speculation was so wonderfull”) となっている。又，己れの魂を悪魔に売り渡したことを嘆く Faustus の言葉を見ても，ドイツ語版では「私が神に対し敬虔な心を懐いていたら……」(“hette ich Gottselige Gedancken gehabt……”) とあるのに対し，英訳版では「私が余りに多くの事柄を知りたいと思わなかったら，このような事態にはならなかったろう」(“had not I desired to know so much, I had not been in this case”) と書かれ，ドイツ語版に見られる教訓的色彩は緩和され，いわゆる「飽くことなき思索家」としての Fautus に高さと大きさとが賦与されているのである。即ち，この英訳版の著者は明らかにルネッサンス的人間昂揚の精神の洗礼を受けて，この Wittenberg の博士に，それを暗示するような様々な特質，例えば，無限なるものへの形而上的渇望，美に対する自由奔放な熱情，古典的人物への畏敬といった特質を付与したのであるが，このような特質は又既に *Tamburlaine* に於いて Marlowe が歴然と示しているように，Marlowe 自身の心の内奥でも支配的な要素であった。従ってこの英訳版に Marlowe が接した時，彼がそこに自らの嗜好を認め，それを彼の劇創作に役立てんと意図したことは必然的なことであったと言えよう。そして Marlowe がこの英訳版に忠実に基きつつも，そこに彼独特の解釈を施し，殆んど耐え難いほどの壮大な魂の葛藤を描き出したことは，この比類なき好奇心の時代に生きた青年 Marlowe の探究的精神の表われであると同時に，彼の偉大な功績であると言えよう。

Marlowe が主人公 Faustus の中に彼自身の心に内在する精神的思想的苦悩を反映させたことは，この劇に彼の自伝的要素が濃厚に示されている

ことからも明らかである。この劇の冒頭で紹介される Faustus の履歴は，まさに Marlowe 自身の履歴を物語っている。Marlowe はその若き青年時代をキャンタベリー大司教 Matthew Parker (1504–75) の奨励で，神学生として Cambridge 大学に学んだ。そこで彼は当時非常な権威とされていた修士号を得たが，その後彼は予定されていた聖職につくことを拒否し，London に上京すると好ましからぬ劇界に身を投じ，或いは又政府の秘密諜報部員としての危険な道を選び，専ら神を恐れざる無神論者としての芳しからぬ名声をほしいままにしたのである。彼が何故 Cambridge での名誉ある前途を放棄して俗世に下ったのか，その間の事情は今日なおもつまびらかではない。しかし，大学在学中から既に謎の欠席が長期にわたって続いており，文学修士号も枢密院の尽力で辛うじて取得するこが出来たということや，又 Baines の誹謗書 (Baines Note) が示すように，彼をめぐって無神論の噂が絶えなかったことなどのいきさつから考えて，少なくとも Marlowe がこの聖職者の地位とは全く反対の道を歩んでいたことだけは確実なのである。この Marlowe の歩んだ道は奇しくも Faustus のそれと著しく類似している。Faustus は神学の研究のために Wittenberg の大学に遊学する。Matthew Parker に該当する人物は，ここでは単に親類 (kinsman) ということになっており，Faustus はこの kinsman の経済的援助を受けるのである。神学に長足の進歩を示した Faustus は，やがて神学博士の称号を授与され，最早神学上の議論で Faustus を凌駕出来る者はいなかった。しかし，能力と知識に対する彼の渇望は癒すことが出来なかった。彼は神学を初めとする諸学問の成果に衷心からの満足を見出すことが出来ず，結局彼の関心は神学から遠ざかり，ひそかに魔法と呪文の研究に耽溺してゆく。

O, what a world of profit and delight,
Of power, of honour, and omnipotence,
Is promised to the studious artizan!

(I, i, 54–6)

と語る Faustus は魔法こそ万能の力を発揮出来る半神 (demi-god)[8] だと思

ったのである。Faustus が自らに課する目的は，人間の持ち得る至上の欲望を達成することであった。

神の軌(くびき)から逃れて人間の可能性をその極限にまで追求せんとするこの Faustus の姿に，我々は作者 Merlowe の，更には彼の生きたルネッサンス時代特有の人間中心の姿勢を読み取ることが出来よう。Marlowe の描く主人公達はいずれを問わず，皆こうした特質の所有者である。スキチアの羊飼い Tamburlaine は雄弁の力とその偉容によって世界の覇者たらんと欲した。マルタ島のユダヤ人 Barabas は，マキアヴェリ的権謀術策によって全世界の富を獲得せんと欲した。そしてこの Faustus は時間と空間を征服し，老衰という人間的束縛から脱し，精霊を支配し，万物の造化の秘密に通じ，全ゆる歓楽の泉を飲み干すことを志向するのである。しかし，これ等絶対の探究者達は，いずれも彼等自身の運命によってその意図を挫かれることになる。Tamburlaine は迫りくる自らの死を征服することが出来ない。Barabas が蓄積した富は没収され，隠蔽していた財宝は危険にさらされ彼は破局を迎える。そして Faustus は神と悪魔の双方に反逆を試み挫折する。彼等は神に離反し，自己を強く主張せんとするにも拘わらず，この自己認識 (self-realization) への渇望は常に激烈な挫折感によって侵蝕されているのである。なかんずく我々は Marlowe の Faustus の中に，このいわば人間対神という凄惨なそして永遠の対決と葛藤を読み取ることが出来るのである。

ところで，この Marlowe の Faustus をめぐって，従来様々な解釈がなされてきた。例えば，Leo Kirshbaum はこの劇を一個の道徳劇と見做しており，作者自身が Prologue で言及している点を指摘して，彼はこの Faustus を羽を蠟づけし太陽めがけて飛翔した無謀なイカルス (Icarus) であると評している。[4] 又一方 Kristian Smidt などは彼をプロメテウス (Prometheus) に喩えている。[5] 即ち，天の火を盗みそれを人類に与えた罰としてカウカソス (Caucasus) の巨岩に縛られたプロメテウスの苦悩を Faustus も又同様に味わうのであると指摘している。これ等二つの解釈は，Faustus を人間としての自負の所有者と見做している点では共通の基盤に

立つものである。しかし，他面この二つの解釈の間には大きな隔たりがあると言えよう。即ち，プロメテウスはやがてその鎖を解かれて自由の身となり，ゼウス (Zeus) と和解するのであるが，一方イカルスは太陽に近づき過ぎたあまり，その蠟は融け転落の悲運を自ら招くことになるのである。イカルスとして把握された Faustus は，エリザベス朝演劇が中世から継承した道徳劇や *De Casibus* 悲劇[6]の伝統に従った人物ということになる。一方解き放たれたプロメテウスとしての Faustus は，少なくとも人間の魂を神の絶対的束縛から解放したその貢献によって，近世及び現代につながる人物として把握することが出来よう。

Kirschbaum が指摘しているように，この劇が中世から継承した道徳劇の形式に基づいて構成されていることには異論がない。己れの学識に食傷し，根本大事の祝福を顧みず，魔術に耽溺する Faustus に関して，Prologue の Chorus は彼をイカルスに喩え[7]，彼の転落を暗示している。又，善天使は再度にわたり彼の驕慢に訓戒と警告を与える。そして地獄に堕ちていく Faustus に対して「お前は天国の至福，言い表わせぬ程の満足，無限の祝福を失なってしまった。お前が美しき信仰を好んでいたら，地獄も悪魔もお前を支配することは出来なかったろうに[8]」と慨嘆する。そして最後の Epilogue では再び Chorus が，この博学な思索家の中にかつてはのびていたアポロの月桂樹の枝もその不埒な行状故に刈り取られてしまったのだと説明して，

> .....regard his hellish fall,
> Whose fiendful fortune may exhort the wise,
> Only to wonder at unlawful things,
> Whose deepness doth entice such forward wits
> To practise more than heavenly power permits.
>
> (Epilogue)

と締め括るのである。これ等の描写はいずれも，形式面では *De Casibus* motif を踏襲するものであり，又道徳劇の特色をも顕著に表わしている。

しかし，仮りに我々がこの *Dr. Faustus* を単に教訓を意図した一個の

道徳劇としてのみ考え，そこに見られる様々な異質の要素を等閑視するならば，この劇の本質は見失われ，その存在価値は著しい損傷を受けることになるのである。その第一の理由は主として外的条件に依るものである。即ち，*Dr. Faustus* が書かれた1591年乃至1592年には，道徳劇の文学伝統が依然として根強く残存していたとは言え，当時の演劇は登場人物が抽象概念を表わすいわばあやつり人形の世界からは遥かに遠ざかっていたという事実である。中世の道徳劇に於ける道具立ては，既に陳腐なものと堕していたのである。従って，そうした時代に時代の趨勢を逸早く察知していた筈の劇作家 Marlowe が，キリスト教的意図のもとにこのような道徳劇を書いたなどとは到底信じられないのである。

第二の理由はこの作品の内的条件に依るものある。Marlowe はこの作品の title を「フォースタス博士の悲劇的生涯」(“Tragical History of Doctor Faustus”) としたのであるが，この場合「悲劇的」(“tragical”) とは一体何が悲劇的なのであろうか。主人公が *De Casibus* 的失墜を迎えるからその一生が悲劇的なのであろうか，或いはもっと異質の意味なのであろうか。この場合我々が注目すべきことは，Faustus の堕地獄が如何なる外的強制に依るものでもなく，自らの自由意志に従って確定されたという事実である。Faustus は様々な誘惑 —Pride, Covetousness, Envy, Gluttony, Lechery, Sloth— に遭遇はするものの，彼はその何れからの支配も受けてはいないのである。Faustus の死が，これ等の誘惑によっていわば強制的にもたらされたものであるとするならば，その死は中世的な因果応報の死と言わなければならない。しかし Faustus の死は，そこに見失われた神へのノスタルジーが共存しているとは言うものの，自ら求めた死なのであり，上述したような不本意な受身的な死では決してないのである。象徴的な表現をするならば，彼の死はいわば彼の意志の主張の結果なのであり，意志の挫折の結果では決してないのである。このような見解に立つならば，Faustus の死が悲劇的 (tragical) であるということには決してならないのである。事実，Nicholas Brooke は，彼の Marlowe に関するエッセイ[(9)]の中で，Marlowe は道徳劇の構造を転倒し逆用したのだと述

べて，Kirschbaum のキリスト教的見解に反論を加えているのである。それでは，この作品が“tragical”であるのは如何なる意味においてであろうか。それは Faustus 自身が，己れの心に内在する二重性を良く認識していたからこそ，「悲劇的」なのである。Faustus は魔術の魅惑に取りつかれたその得意の絶頂に於いてすら，「耳に轟く恐しいこだま」(“fearful echoes thunders in mine ears”[10]) を聞くのである。一方には己れの魂を時間と空間に向けて羽ばたかせ，これを自由にのばして行きたいという渇望があり，又他方にはこれに挑戦することは罪悪であり神への離反であると教える古い信念の軛があり，この二つの相対立する要素の中で Faustus の自我は分裂し，ボロボロになってゆくのである。古い道徳劇に於ける如何なる人物と言えども，Faustus ほど自らの心の内面を執拗なまでに語り，煩悶した人物はいないのである。思考と行動の両面に於いて Faustus は黙考し，思索し，煩悶し，挑戦するのである。こうした Faustus の姿は抽象概念のあやつり人形ともいうべき道徳劇の Everyman[11] と言うよりは寧ろ知識の探究者としての Adam や，ギリシャ文学に於ける挑戦的英雄 Prometheus を想起させるものと言えよう。こうした点を考慮してみる時，この劇を単にキリスト教の理想を殊更に訴えんとした道徳劇とのみ結論づけることは出来ないのである。

さて，Faustus の魂の分裂は既に一幕一場に登場する善天使，悪天使の言葉によく象徴されている。善天使が呪うべき書物を捨てなければ神の烈しい怒りを招くと Faustus を諭せば，悪天使は魔術に精進し四大元の支配者になれと彼を鼓舞するのである。

Good Ang. O, Faustus, lay that damned book aside,
And gaze not on it, lest it tempt thy soul,
And heap God's heavy wrath upon thy head!
Read, read the Scriptures:—that is blasphemy.
Bad Ang. Go forward, Faustus, in that famous art
Wherein all Nature's treasure is contain'd:
Be thou on earth as Jove is in the sky,

Lord and commander of these elements.

(I, i, 71—8)

この両天使の相対立した思考は，そのまま二幕一場の書斉に一人坐する Faustus の内的独白に引き継がれている。Faustus は自ら神を放棄し，地獄の王者 Belzebub への献心を誓うが，その刹那彼は己れの耳に囁く声を聞くのである。

.....O, something soundeth in mine ear,
"Abjure this magic, turn to God again!"
Ay, and Faustus will turn to God again.
To God? he loves thee not;
The God thou serv'st is thine own appetite,
Wherein is fix'd the love of Belzebub:
To him I'll build an altar and a church,
And offer lukewarm blood of new-born babes.

(II, i, 7—14)

このように彼は堅固な意志を誇る瞬間に於いてすら心が決まらず，劇の当初から彼の心は絶えず動揺し，希望を持つかと思えば棄て，高言するかと思えばおののくのである。彼は神と悪魔の間を絶えず逡巡している。こうした Faustus を J. B. Steane は「振子の運動」(the swings of the pendulum) のようだと評している。(12)

Bad Ang. Go forward, Faustus, in that famous art.
Good Ang. Sweet Faustus, leave that execrable art.
Faust. Contrition, prayer, repentance—what of these?
Good Ang. O, they are means to bring thee unto heaven!
Bad Ang. Rather illusions, fruits of lunacy,
That make them foolish that do use them most.
Good Ang. Sweet Faustus, think of heaven and heavenly things.
Bad Ang. No, Faustus; think of honour and of wealth.

Faust. Wealth! Why, the signiory of Embden shall be mine.

(II, i, 15—23)

Faustus には神を肯定する自由意志もあれば，否定する自由意志もあり[13]，又その選択能力もある。それにも拘わらず，彼の心は煩悶し，逡巡するのである。Mephistophilis から奉仕の代償に，肉体と霊魂を譲り渡す誓約書の作製を強要された Faustus は，自らの腕を傷つけその流れる血をもって誓約書を書くが，中途で血が凝結し署名が出来ないのである。そして Faustus は言う。

What might the staying of my blood portend?
Is it unwilling I should write this bill?
Why streams it not, that I may write afresh?
Faustus gives to thee his soul: oh, there it stay'd!
Why shouldst thou not? is not thy soul thine own?
Then write again, *Faustus gives to thee his soul.*

(II, i, 64—9)

Mephistophilis の差し出す火皿で血を溶かし，漸く署名を終えた Faustus は「事きわまりぬ」(“*Consummatum est*”[14]) と言うが，これは十字架上のキリストが語る最後の言葉であって，それを Faustus が利用したことは皮肉な冒瀆である。何故ならば，キリストは人間の原罪を贖うために血潮を流したのであるが，この Faustus は現世的快楽のために神の祝福を放棄してしまうからである。その直後に神の警告「人間よ逃れよ」(“*Homo, fuge*!”[15]) という文句が彼の腕にあらわれると，今拒否したばかりの神を肯定するのである。しかし Faustus には逃れようにも逃れる場所がない。

Homo, fuge! Whither should I fly?
If unto God, he'll throw me down to hell.
My senses are deceiv'd; here's nothing writ:—
O yes, I see it plain; even here is writ,
Homo, fuge! Yet shall not Faustus fly.

(II, i, 77—81)

Faustus は故意に自らの意志を神の意志に対抗させているのである。彼は神の意志に挑戦せんがために，地獄の存在を否定し，死後の世界の無限の責苦を否認するのである。

Faust. I think hell's a fable.

Meph. Ay, think so, till experience change thy mind.

Faust. Why, dost thou think that Faustus shall be damn'd?

Meph. Ay, of necessity, for here's the scroll

In which thou hast given thy soul to Lucifer.

(II, i, 128—32)

結局，彼の傲慢なる挑戦も，苦悩する不安の仮面に過ぎないのである。天上を仰ぎ見た Faustus は後悔の念を覚え，天上の悦びを奪った Mephistophilis を激しく責めたてる。彼の心は一瞬悔俊に傾くが，悪天使の「お前は精霊であり，神が憐れんでくれる筈がない」[16] という言葉に，Faustus の心は頑なになり，悔い改めることは出来ないのである。[17]

My heart is harden'd, I cannot repent:

Scarce can I name salvation, faith, or heaven,

But fearful echoes thunders in mine ears,

"Faustus, thou art damn'd!"

(II, ii, 18—21)

救済が不可能であるという意識が彼の心を絶望へと駆り立てる。しかも，Lucifer との契約にも拘わらず，彼は何事にも満足を見出せないのである。魔術によって彼の得たものは些細なものに過ぎず，彼が当初考えたように，魔術によって彼自身が，「人の心の及ぶ限り拡がってゆく」[18] ことは決してないのである。魔術は，唯単に，人間を超越し半神たらんと欲した Faustus の可能性を実現させる道具に過ぎないのである。その意味では Marlowe の魔術の扱い方は，彼の Seneca や Machiavelli 思想の扱い方と同じである。いずれの場合も，Marlowe は一般通念として悪と見做されていた思想を故意に用いているのである。Tamburlaine も Barabas も Faustus も，その意味では同じ基盤に立っている。法に優る世界の覇者になることによって，

次には狡猾な術策を用いることによって，そして最後には魔術を用いることによって，奔放な自由と自己の拡大を求めようとのしたである。Tamburlaine や Barabas の場合はそれによって或る程度の自由を獲得出来たのである。その意味では彼等は敗北者ではなく，寧ろ雄々しき勝利者であったと言えよう。けれども Faustus の場合，彼は満たされるということが決してなく絶望し，自ら地獄を選んだのであり，そして究極的には己れの死がかくあるべきでなかったことを苦悶のうちに認識していたのである。

Faustus の最後の苦悶の独白は時間に対する必死の，しかし無益な抵抗から始まる。今や絶望の淵に追い込まれた Faustus は，天体に静止することを願い，真夜中が永久に訪れぬことを願う。しかし如何なる嘆願にも拘わらず，時間を征服することの不可能なことを悟った Faustus は，神に対する最後の絶望的な接近を示し，そこにキリストの贖われた血潮の幻を見るのである。

See, see, where Christ's blood streams in the firmament!
One drop would save my soul, half a drop: ah, my Christ!—
Ah, rend not my heart for naming of my Christ!
Yet will I call on him: O, spare me, Lucifer!—

(V, ii, 150—3)

そして彼は皮肉にも神の慈悲ではなく悪魔の慈悲を求めて叫ぶのである。「おお，ルシファー助けてくれ」[19] ("O, spare me Lucifer") と。その瞬間，贖われた血潮の幻は消え，神の怒りがとって代わるのである。彼の魂は消滅することを拒み，神は慈悲を与えることを拒絶する。やがて十二時が報ぜられると，Faustus の心の内を吹き荒れる苦悶の嵐は絶頂に達する。彼はたとえ一度は地獄に堕ちようとも，最後には救われる道が拓かれることを願ったのである。しかし，呪われた魂に極限はなかった。劇の冒頭で，Faustus 自身「だがお前はまだ単なるフォースタス。一介の人間にしか過ぎないのだ」と言って，神から与えられた人間の地位に絶望し，人間の限界を超えて飛翔したにも拘わらず，今や再び彼は一個の卑少な人間に戻ったのである。彼は己れの魂が水滴となって大海に落ち込むことを，或いは

又己れの肉体が分解し消滅してしまうことを願うのである。

O, it strikes, it strikes! Now, body, turn to air,
Or Lucifer will bear thee quick to hell!
O soul, be changed into little water-drops,
And fall into the ocean, ne'er be found!

(V, ii, 187—90)

地獄を作り事として退け乍らも，堕地獄とか死という言葉の持つ重みはFaustusの心に募るばかりである。しかしそうかと言って神に近づくことも出来ない彼の精神的苦悶は，この終幕に於ける恐怖の異常性という点で，まさに慄然たるものを感じさせるのである。運命の刻限は容赦なく彼に迫り，彼は絶望のうちに悪魔にその身を八つ裂きにされ，後には死と堕地獄のみが残るのである。*Faustus* 以前の如何なる英国演劇に於いても，主人公の内面の葛藤をこれ程までに克明に表現し得たものは決して存在しなかったのであり，この作品は英国演劇の伝統の中でも特異な位置を占めているのである。[20]

ところでFaustusの絶望は何を意味するものであろうか。即ち，それは自我の主張とも言うべき傲慢，野心，反抗が，結局如何なる意味の精神的救済 (Salvation) をも彼にもたらさなかったということに他ならないのである。換言すれば，それは人間の二元性が提示する宗教問題なのである。人間であるが故に限界として甘受せざるを得ない人間の弱さや矛盾は，究極的には宗教によって解決されなければならない問題である。[21] それにも拘わらず，Faustusが神を拒否せざるを得ないのは何故であろうか。注目すべきことは，この場合 Faustus の考える神が，人間の自由意志を徹底的に拒否し，大なる知られざる者として君臨する冷酷無情な神であることである。それは当時 Oxford や Cambridge の学者達から圧倒的な支持を得ていたカトリック派やカルビン派，ルッター派の教える愛なき絶対者としての神なのであった。神の絶対的支配を認め，人間の運命はこの神の任意の意志により決定されるとするこの厳格なキリスト教神学は，Faustusの知的な驕慢に，想像を絶する圧迫を加えたのである。その結果悔悛，祈祷，

慈悲の嘆願を以てしてもこの神の赦しは得られないと信じた Faustus は，遂には自らの堕地獄を不可避なる却罰であると確信するに至ったのである。

'*Stipendium peccati mors est.*' Ha! '*Stipendium,*' etc.
The reward of sin is death: that's hard.
'*Si peccasse negamus, fallimur*
Et nulla est in nobis veritas.'
If we say that we have no sin,
We deceive ourselves, and there is no truth in us.
Why, then, belike we must sin,
And so consequently die:
Ay, we must die an everlasting death.
What doctrine call you this, *Che sera, sera*:
What will be, shall be? Divinity, adieu!

(I, i, 39—49)

「罪の払う値が死である」とするなら，Faustus の死は必然的に運命づけられたものである。救済を与えない神や天国は彼にとって妄想に過ぎないのであり，それなら寧ろ地獄の Belzebub に望みをつなぐ方がましだと彼は考えるのである。

Now, Faustus, must
Thou needs be damn'd, and canst thou not be sav'd.
What boots it, then, to think on God or heaven?
Away with such vain fancies, and despair;
Despair in God, and trust in Belzebub:
Now go not backward; Faustus, be resolute:

(II, i, 1—6)

しかしFaustusのこの神への挑戦が実は彼の心に内在する不安と動揺と絶望の変型に他ならないことは前述の通りである。訣別した神への執着と，又これを潔しとしない人間尊重の合理的精神とが，畢竟 Faustus の心を分

裂させ煩悶させるのである。「地獄は作り事だ」とか「地獄は俺にとって天国だ」[22]と豪語しながらも，心の一方では，彼は地獄の恐怖に取りつかれ苦悶するのである。そしてこの呪われた地獄に関して，彼は Mephistophilis に執拗に問い質している。

Faust. How comes it then that thou art out of hell?

Meph. Why this hell, nor am I out of it:
Think'st thou that I, that saw the face of God,
And tasted the eternal joys of heaven,
Am not tormented with ten thousand hells,
In being depriv'd of everlasting bliss?
O, Faustus, leave these frivolous demands,
Which strikes a terror to my fainting soul!

(I, iii, 76—84)

天上の祝福を剝奪され，永却の地獄に堕ちた魂に救いはないと返答する Mephistophilis の心は，その地獄の恐しさに慄えおののくのである。Faustus は彼の不甲斐ない魂を叱咤するように「俺から不撓不屈の精神を学ぶがよい」("Learn thou of Faustus manly fortitude")[23]と激励するのであるが，しかしこの Faustus の大言壮語が実は彼自身の心の不安の裏返しに過ぎないものであるとすれば，この Faustus の言葉は極めて痛烈な irony であると言わなければならない。Faustus は最も傲慢なる神への挑戦者であると同時に，最も傷ましい自信喪失者なのである。そして，このような観点に立つならば，地獄に堕ちてなお無限地獄の恐しさを語る Mephistophilis も，又，相対立した概念の代弁者たる善悪両天使も，更にはこの劇の終幕に登場する信仰厚きプロテスタントの老人も，すべてが Faustus の分身であったと言えよう。[24]又，同時にそれは作者 Marlowe 自身の心に内在する二面価値 (ambivalence) の象徴でもあったのである。終幕に登場するこの老人は，絶望する Faustus に向い罪に対する無謀な執着をやめ，悔悛し慈悲を求めるよう勧告する。老人の言葉は，救済に関しての人間の自由意志の重要性を強調するものであり，これは明らかにプロテスタント

的見解に立つものと言えよう。

Old Man. Oh, stay, good Faustus, stay thy desperate steps!
I see an angel hover o'er thy head,
And, with a vial full of precious grace,
Offers to pour the same into thy soul:
Then call for mercy, and avoid despair.

(V, i, 68—72)

地獄と神の恩寵とが互いに争い Faustus を苦しめる。しかし，この老人の言葉を以てしても，遂には Faustus を救うことは出来なかったのである。彼は生ぬるい悔悛よりは，絶望を自ら選択するのである。重要なことは，Faustus の堕地獄が究極的には彼自身考えていたような，必然的に運命づけられたものでは決してなかったということである。Faustus は自らの意志に基づいて天国ではなく地獄を選んだということなのである。ただ，Faustus の選んだ地獄は，決して中世的責苦の恐るべき場所としての地獄ではなく，それは Faustus 自身が自らの意志を奔放に主張出来る場所としての彼自身の地獄だったのである。Faustus が "what will be, shall be" という運命観を軽蔑し，神の慈悲に強情に反抗してゆく姿は，まさに人間の自由意志を否定する公的キリスト教神学に対する痛烈な irony というべきではなかろうか。又「地獄は作り事だ」と豪語する Faustus の反抗は人間性のための反抗であり，これをもっと広義に解釈するならば，ルネッサンス・ヒューマニズムがその底に秘めている反教義精神の表われとして見做すことが出来よう。

Marlowe は *Tamburlaine* や *The Jew of Malta* に於いて，無神論に近い反キリスト教的諷刺を示したが，彼自身は厳密な意味での無神論者ではない。それは彼が神の存在そのものを否定している訳ではないからである。今日に伝えられる昔の文書では，確かに Marlowe は無神論者として告訴されるような発言をしている。例えば，Baines の誹謗書 (Baines Note) に依れば，Marlowe は「宗教のそもそもの始まりは人々に畏怖の念を与えることであった」[25] とか又「もし神や宗教があるならカトリック教徒の中

にある。何故ならきらびやかな儀式づくめだから。そしてプロテスタントは皆偽善者の馬鹿者だ[26]」などと発言したと言われているのである。しかし，Marlowe のこのような発言は，無神論というより寧ろ冒瀆なのである。それは神の存在を認めるが故の激しい抗議なのである。換言すれば，神の人間の扱いに対する抗議反抗である。Marlowe のおこなった幾多の冒瀆的発言は，今日の我々の眼から見れば，それは単なる自由思想家[27]の発言に過ぎないのであり，別の観点からすれば，それは当時の宗教の外面性に対して，又当時の教会の内側の腐敗と偽善に対して Marlowe が浴せた反抗精神の表われであったのである。当時の漸く芽生え始めた自由思想の洗礼を受けた若く多感な青年が，既存のキリスト教社会に様々な矛盾をみとめ，それを告発したいと思ったとしても不思議はない。その意味では，Marlowe はキリスト教の外面的要素を排斥することによって，実は宗教の内面性を強調しているのだとも言えよう。

この Faustus の呪われた死に関して，どのような解釈をするにしても，その死が極めてルネッサンス的な死であったことに疑問の余地はない。つまり Faustus の死を単に「汝の魂を悪魔に売るな」といった中世的教訓を提示した道徳劇の踏襲としてのみ解釈するには，Faustus の描写は余りにも人間的なのである。注目すべきことは，たとえ Faustus が結末に於いて己れの犯した罪科の故に，地獄の存在を己れ自身の魂の中に認める結果になったとしても，Faustus が地獄の存在を否定し，神に挑戦したという事実は否定出来ないことであり，そのことは又彼自身が落し戸から舞台下の煙幕と火花の中に落ち，悪魔によってずたずたに引き裂かれ，そのちぎれた彼の腕や脚が舞台中央に投げ出される場面になっても，極めて重要な意味を持っていると言えるのではなかろうか。Epilogue に於いて作者はこうした Faustus を「真直ぐにのびる筈であった枝は折られ，この博学な思索家のうちに芽生えていたアポロ（学術の守護神）の月桂樹の枝は燃えつきてしまいました[28]」と説明役 (Chorus) に語らせているが，そこには逡巡しつつも結局神への信仰を懐き得なかった Faustus への憐憫の情がそこはかとなく感じられるのである。人間を宗教の軛から解放し，無

限の可能性を求めんとする心の一方では，霊的な世界の存在を認めようとする，いな認めざるを得ないといった矛盾した感情との相剋に煩悶するFaustusの苦悩は，作者自身の苦悩であると同時に，中世的世界観から完全に脱却しきれずにいるルネッサンス人の悩みをも伝えている。それは又そのまま中世から近世へと移向していく過渡期エリザベス朝の人々が，不可避的に背負わされた複雑性，多様性を物語るものである。より強く人間的なものに惹かれながら，しかも尚，神から完全に脱却出来ないで苦闘するFaustusの姿は，壮大であると同時に，余りにも悲劇的なのである。これを更に普遍化して考えてみるならば，今日20世紀といういわば科学万能の時代に，依然として精神の安息を求めて苦悩する我々自身の姿でもある。その意味では，MarloweのFaustusは普遍的人間の二重性という苦悩を最も鋭角的に描写した人間像であると言えよう。

（本稿は昭和45年度秋期芸文学会シンポジアム「われ等のファウスト」に於いて口頭発表した原稿に若干の加筆を施したものである。）

NOTES

(1) cf. F. S. Boas, Introduction II (Date and Source of the Play) in *Doctor Faustus*, (ed.) Boas (Gordian Press, 1966), P. 6. 尚本稿 168 頁に於けるドイツ語版及び英語版 *Faustus* の引用は全てこの Boas の Introduction (p. 14) に依拠した。

(2) 英国に於ける Faust への最も古い言及は 1572 年に出版された *Ghostes and Spirites* の中に見られる。Ludwig Lavater が書いたものを R. H. なる人物が翻訳したものであるが，これによって Faustus は可成り早くから英国に輸入されていたことが分かる。

'What strange thinges are reported of one Faustus, a German, which he did in these our dayes by inchauntments.'....'God at the last will chasten' [such men] 'with deserved punishment.' (quoted in *Ibid.*, 12.)

(3) I, i, 63.

(4) Leo Kirschbaum, "Dr. Faustus : A Reconsideration," *Critics on Marlowe*, (ed.) Judith O'Neill, (George Allen and Unwin Ltd., 1969), P. 82.

(5) Kristian Smidt, "Two Aspects of Ambition in Elizabethan Tragedy,"

English Studies, (Amsterdam, Swets & Zeitlinger, 1969) VOL. L, No. 3, P. 241.

(6) 中世以来の Non-Dramatic Literature に深く根差した文学伝統の一つと言えよう。栄華と繁栄の頂点から破滅へと失墜してゆく英雄の悲劇を謳ったこの文学伝統の出典は Boccaccio の *De Casibus Virorum Illustrium* であり，英国に於いては Chaucer 及び Lydgate 等によって継承された。更に16世紀には，*The Mirror for Magistrates* などの韻文に於いてその発展を見たものである。"*De Casibus*" 伝統のそもそもの発端は，ローマ時代以来広くヨーロッパに流布していた運命の女神 (Fortune) であるが，キリスト教の発展に伴って，この女神は，人間の原罪に起因する全ゆる邪悪や悪徳，主として人間の pride を責め，これを罰する者であるとして，極めて合理的に描写されるようになった。

(7) Till swoln with cunning, of a self-conceit,
His waxen wings did mount above his reach,
And, melting, heavens conspir'd his over-throw;
(Prologue, 20—2)

(8) Good Ang. O thou hast lost celestial happiness,
Pleasures unspeakable, bliss without end.
Hadst thou affected sweet divinity,
Hell, or the devil, had no power on thee.
(V, ii, 110—3)

(9) Nicholas Brooke, "The Moral Tragedy of Dr. Faustus," *Critics on Marlowe*, (ed.) Judith O'Neill, (George Allen and Unwin, 1969), p. 104.

(10) II, ii, 20.

(11) この劇では主人公 Faustus を通して，作者 Marlowe 自身の苦悩が描写されているのであり，その点，抽象概念の対話である *Everyman* とその特色を著しく異にしている。

(12) J. B. Steane, *Marlowe: A Critical Study*, (Cambridge U. P., 1964), P. 165.

(13) 神の恩寵を受け入れるか否かの選択能力が Faustus に備わっているという事について Kocher が詳述している。
〔cf. Paul H. Kocher, *Christopher Marlowe*, (Russell & Russell, 1962), pp. 110-2.〕

(14) cf. *John*, 19: 30.

(15) From *the English Faust Book*, ch. V, at the end. (cf. Boas, *op. cit.*, 84).

(16) "Thou art a spirit; God cannot pity thee." (II, ii, 13.)

(17) 罪人の心が頑なになることは *Exodus* 4:21; 7: 3, 13; 8: 15, 32 に於いて頻繁に言及されている。カルビン派はこれを楯にとって神が人間の心を頑な

にすると言った。一方，プロテスタント派は，人間が堕落した心のままでいると頑なになる。しかし神の恩寵によってのみ，その心を柔らげることが出来ると主張した。Faustus は後者の立場をとっている。(cf. Kocher. *op. cit.*, 111—2.)

(18) "Stretcheth as far as doth the mind of man;" (I, i, 62).

(19) V, ii, 153.

(20) この Marlowe の功績に関しては，多くの批評家が一致して認めるところである。〔cf. Wolfgang Clemen, *English Tragedy before Shakespeare*, (Methuen, 1961), P. 152; Richard B. Sewall, "The Vision of Tragedy in *Doctor Faustus*," *Twentieth Century Interpretations of Doctor Faustus*, (ed.) Willard Farnham, (London, Prentice-Hall, Inc., 1969), P. 61; Steane, *op. cit.*, 157.〕

(21) この問題に関して，Ellis-Fermor は，キリストの教えの特色である健全，明快，分別といった特質を Faustus も又共有していたと指摘し，Faustus がキリストの教えに共感しなかったのは不思議だと述べている。
U. M. Ellis-Fermor, *Christopher Marlowe*, (Hamden, Archon Books. 1967), p. 76. その他 cf. Steane, *op. cit.*, 162.

(22) "I confound hell in Elysium :" (I, iii, 62).

(23) I, iii, 87.

(24) cf. Ellis-Fermor, *op. cit.*, 67 & 81.

(25) "...the first beginning of Religion was only to keep men in awe...." 〔quoted in John Bakeless, *The Tragicall History of Christopher Marlowe*, (Archon Books, 1964), Vol. I, p. 111.

(26) "...if there be any god or any good Religion, then it is in the Papistes because the service of god is performed with more Cerimonies, as Elevation of the mass, organs singing men, Shaven Crownes, & cta. That all protestantes are Hypocriticall asses..." (*Ibid.*)

(27) Marlowe 同様 Faustus も又自由思想家 (freethinker) としての特質を備えている。e. g. "Think'st thou that Faustus is so fond to imagine/That after this life, there is any pain?/No, there are trifles and mere old wives' tales." (II, i, 134-6)

(28) Cut is the branch that might have grown full straight,
And burned is Apollo's laurel-bough,
That sometime grew within this learned man.

(Epilogue, 1—3)

〔Text: *Doctor Faustus*, (ed.) F. S. Boas, New York, Gordian Press, 1966〕